■ 書 評 ■

秦政春・NHK 教育プロジェクト
『公立中学はこれでよいのか』

群馬大学 永井聖二

本書は、平成3年11月にNHK テレビで放送された番組「義務教育はこれでよいのか」をもとに、秦政春氏とNHK 教育プロジェクトの共著として公刊されたタイムリーな好著である。

はじめに概要を紹介しておく、第1章は「公立中学は、今」と題して私立中学ブームの問題をとりあげ、以下第2章では生活指導の見直し、第3章では不登校の問題と今日的な問題を要領よく検討していく。次いで第4章では学習指導面に眼を転じ、授業についていけない生徒が多い実態をとりあげたうえで、第5章では中学校のカリキュラム構成の過程の現状について疑問を呈している。

秦氏とNHK 教育プロジェクトの共著として出版されたものであるが、秦氏が署名入りで論述しているのは「ストレスいっぱいの教師たち」(87頁～106頁)と題する論稿の部分だけであり、その他の部分について氏がどのようにかわられたかは、明らかではない。啓蒙的なものであるうえ、そうした事情もあって、学会誌の書評としてどのレベルでものを言っただけでよいのか、評者としても困惑する部分も多いのであるが、まず本書全体について、ついで秦氏の論稿について、恣意的ながら感想を記すことをご寛恕をいただきたい。

まず、本書全体についていうと、なか

なかにそつなくまとめられた好著という印象である。私立中学ブームの問題、生徒規則と管理教育、不登校10万人時代、いわゆる「七・五・三」の問題、習熟度学習の導入等々、現代日本の中学校の問題状況を的確におさえていく。

その論旨は飛躍がなく説得的である。時期的に出版後に話題になった業者テスト問題を別にすれば、現代の学校教育の問題点を集約した観がある中学校の問題状況をまことにそつなくまとめた好著というほかはない。私立ブーム、不登校、管理教育、「七・五・三」といった内容がこの学会でもしばしば議論にのぼるテーマであることに加え、そうした現象の背景説明にも、日本社会の階層化、文化的再生産論、プライバタイゼーションなど、教育社会学的な視角からの解説が多く、学会員の多くにとってもなじみやすいものであろう。

その意味では現状とその背景の分析に関しては大変よくまとまった啓蒙書なのであるが、その一方で、困難な状況のもとでの教育実践のあり方についての論述になると、ステレオタイプ化された指摘がめだつのは残念である。具体的にいうと、「現場の教師は懸命にやっている。文部省は悪い」という図式の方向での主張が、さほどの吟味もなく持ち込まれているのがいかにも気になる。評者として

も、そうした結論そのものが必ずしも不当だと主張するつもりはないのだが、この種の出版物として最も無難な結論を、具体的な分析を十分に経ないままに、ア・プリオリに提示しているのではないかという不満を禁じえないのである。たとえば、第4章「授業がわからない—図形の論証をめぐる—」とそれに続く第5章「何をいつどのように教えるか」は、大変重要な問題を扱う章なのであるが、その結論は現行の学習指導要領に無理があり、教師は被害者というトーンでまとめられている。実は第4章で引用されている小関純氏らの共書「図形の論証指導」は、発展段階を考慮した指導の在り方とはいかなるものなのかについて、実践的に、しかも単に現場の常識の再生産というものでなく、明らかにした点で評者も高く評価している研究なのである。小関氏は、ことさらに現場の教師たちを批難しているわけではないが、ピアジェに触発されながら、図形の論証指導について真に発達段階を考慮した指導の在り方について論じ、その可能性を強調するのがその主張の趣旨である。教師の取り組み次第で生徒の理解度は大きく左右されるのだというのであるから、現場での指導の現状にはネガティブなとらえ方が中心になっている、と理解する方が自然であろう。ところが、この章における小関氏らの研究の引用のされ方は、そうした個々の教師の実践の可能性にふれられる方向ではない。おそらくはこうした形の引用は、原著者の意図を損なうものといえよう。小関氏らの研究をかなりのウエイトをもってとりあげながら、問題

解決の方向性についての記述になると被害者としての教師の立場を強調して、さまざまな実践の可能性について論及しないのは、悪い意味でジャーナリスティックな「無難な」扱いにすぎるとはいえないだろうか。

今日の困難な状況のもとで教師たちの苦勞が多いことは当然だが、学校教育の問題状況が議論される場合、教師の心がまえにすべてを帰結させて論じるのか、逆に教師被害者論に終始するのか、そのいずれかに偏ってしまうのが、従来の学校論、教師論の不毛の一因といえるだろう。おそらく、そういう形のコメントの付けかたこそが、教育の問題をジャーナリズムがとりあげる場合に、きわめて好都合なのであろうけれど、教育社会学者がマスメディアにかかわる場合にその真価を問われるのは、そうした常套的な図式の結論に、もう少し実態からの知見を反映させることができるかどうか、ということになるといえよう。

次に、秦氏の論稿「ストレスいっぱいの中教教師たち」について、感想を記しておきたい。この論稿は、もともと教師の仕事の無限定性が教師のストレスを生み出すものであることを強調したうえで、昨今の荒れる学校が教師のストレスを増加すると指摘する。教師たちはこの困難な状況のもとで、同僚との人間関係に悩み、増幅されたストレスは子どもたちへも“ネガティブ”な影響を与えている。そして、こうした現状認識をもとに著者は「教師のストレスを一人の個人的問題にするつもりは、まったくない。…むしろ、教師を取り巻く環境や、教師と